

昭和三十四年五月十三日發行（三種郵便物認可）
（毎月一回、十五日發行）

（通第一三二号）

慈

光

目 次

敷異抄の讚仰……………	花田正夫……………(1)
信仰徹底の一念(一)……………	近角常観……………(3)
求道会館の石の鐘(二)……………	聴聞子……………(9)
善知識を訪ねて……………	福島政雄……………(11)
布袋鞠を蹴るの図……………	榊原徳草……………(14)
正信偈私解(十)……………	白井成允……………(18)

第十一卷

第五號

歎異抄の讃仰

— 近角先生御病中の詩を通して —

花田正夫

ダイヤモンドは見る人の方向によつて種々な光彩を放つように、歎異抄は読む人の心に応じて無量無辺の光明を放つて、或は暗黒の胸をひらく光源となり、或は生死の苦海に大船となつて、よろこびとたのもしさを恵まれる。

近角先生が六十四歳の大病中の詩に

歎異抄讃仰

昭和七年十月六日。

専修と無碍と、

紫朱祖風を素す

両端の異義を排して面背玉玲瓏たり

とある。

即ち専修賢善を主義とする律法的念仏者と、悪無碍にとどまる放縱的念仏者とが、丁度紫が朱をうばうように、自らの非を覺らずして我正しと互に主張し合つて、そのために祖師の眞信がみだされて行く。

で縛られている業人である。

悪がやまぬくとなげいているのは、悪煩惱という鉄鎖で縛られている業人である。

金であれ、鉄であれ、縛られた身は一步も出られない牢獄の苦しさが永遠に続く。

そのことは自分の力で知るのではない、我慢の塊りとも云うべき身に知れるはずもない。ただ仏の智見によつてかねてしるしめすところである。

「くちには願力をたのみたてまつるといいて、心にはこそ悪人を助けんという願不思議にましますというとも、さすがよからんものをこそたすけたまわんずれと思ふ」

これが五分五分根性のやまぬ我々の心底である。打たれても叩かれても、誉められても、罵られても、亦逆に頭燃を払うが如く努力しても消すことの出来ぬ心である。このために、善悪の二業に縛られて、一步も出られないのである。

かゝる身に、聖人は

「しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず。念仏にまさるべき善なき故に。悪をもおそるべからず。本願をさまざまぐる程の悪なきが故に云云」

その有様を見聞する遺弟、唯円大徳は老の涙もとどめあえず本抄を著わして、律法的遠慮心と、悪無碍的横着心の両端の異義を憐れみかなしんで、面に耳底にのこる祖聖の実語を掲げ、裏に異義の疑雲を照破してあますところもなく、玲瓏玉の如くすみわたる歎異の文は、讃すべき言葉も見出されない、とのおこころであらう。

『求道』のなかに近角先生は

「歎異抄を一口で評すると、結局、我々の頭が、永劫に、善し、悪しに縛られて、一步も出られない。それが迷いの根本であることを知らしめられる」

と語られているが、誠に眼光紙背に徹したお言葉である。

善くなれぬくと苦しんでいるのは、善煩惱という金鎖

とも

「他方をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」とも、

「さればよきことも悪しきことも業報にきしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらせばこそ他力にては候え」と常に繰り返し仰せ下さる。

近角先生御病中の詩の一節に

「歎異一篇後昆に伝う、思想險惡何ぞ論ずるに足らん」ともある。

これは太子憲法第二条の「人はなはだ悪しき者はなし、よく教うれば従う」との意と同じものである。

かかる念仏無碍の白道は、未通つた弥陀阿仏の大慈大悲心からひらけることを、涅槃経に照らしての詩、

阿闍世王の爲に、涅槃に入らずの章、

善巧大聖の涙、矜哀し給うこと無尽蔵なり

と先生は随喜せられている。

仏御入滅の近い日、王舎城の大悲劇がおこり、遂に悪逆の王阿闍世も大煩悶におちた時、遙かにみそなわす仏陀は、阿闍世のために涅槃に入らずと仰せられた。この時他の仏弟子達は「心をこめて世尊の長寿を願うのに世尊は応え給わずに、何故に悪逆の王のためにかくも仰せらるる

や」と不審を起した。その時「阿闍世は煩惱具足の身である、法身の常住を信する力もない。その故にこそ」と仰せられた。この思召はそのまゝ本抄の第九章の、仏恩をよるこべず、浄土をこいしと思えぬ、煩惱具足、煩惱興盛の我等を、仏のかねてしろしめして、ことに憐れみ、給うみ心そのままである。この無尽蔵の大聖矜哀の涙に阿闍世も救済される如く、罪悪深重の我等も、弥陀大悲の大海に同化されて一味の潮と転ぜしめて下さるかたじけなさに、無限の

信 仰 徹 底 の 一 念 (一)

大正七年三月、求道十四卷一号

近 角 常 觀

思いをつかまえて居る信仰の危険
青年の方にも、同行、信者の方にも、よく聞いて頂かなならぬ。信者の方の「こう頂いた」「あゝ頼んだ」が、結局自分の思いである如く、青年の方が、長らく信仰を聞いて

喜ばしいことは如何にも喜ばしい。けれどもそれが結局自分の心に、喜ばしく、思つた、単なる思ひになつて居る時は、信者の方の「斯う頼んだ」「あゝ頂いた」が、結局何処が頂けてあるのか分らぬ如く、殊に人生上何か非常な失望に

陥入ることが往々出来て来るのである。若しかくの如く、弥々人生が行き詰つたとなつた際に於いて、忽ち砕け、もういけぬとなるようであるとすると、それは真に信樂開發した一念の信心であつたといふことは出来ぬ。

これは色々の場合があられようと思つたから、色々の方面から申し度い。皆様の中にはこういう方もあられようと思つたのである。それは今より五六年前、或人が非常に喜んで居られた。処がその方の御夫人が亡くなられた。「自分はこんなに喜んで居つたのにこういふひどい事が出来て来る」と、これで喜ばなくなつた方があつたのであつた。これはこの夏なども随分お子さんの亡くなられた方が沢山ある。子供の時より御催促々々と聞いて居たけれども、弥々となると「如何に仏だとして子供まで取り上げて迄催促せぬかてよさそうなのだ」と、こういうことで、喜ばなくなることが、幾らもあり得るのである。これが青年は青年、信者は信者であるのである。

現に私なども、先達來報恩講で諸方面に参りてお話をさせて貰つて居る。或時話しながらふと思つたには、
「これは今日も御影向、明日も御影向であるとお話して居るのであるが、言つて居る自分が第一その心持ちになれて居るか。言つて居る自分は慣れ子になつて、その心持ちになれて居ぬではないか」

感懐を述べられたものである。

先生は又「歎異抄は、教行信証の天体を観測する望遠鏡であり、又拡大鏡であり、顕微鏡である。」とも申され、本典と本抄との一味さを、「歎異抄愚註」と題されて、「信界建現」誌で最後の日まで讃仰して下されたことであつた。

とこうなるともうお話がしにくくなつて来る。すると、「仏前を莊嚴したのが報恩講なのか」「お齋を喰べるのが報恩講なのか」「勤行するのが報恩講なのか」と、段々話して来ると、肝腎の自分の心持ちが御影向になれて居ぬのであるから、何も物がなくなつて甚だ妙なことになつて来る。

これは全体我々は、信ずる時に何か物を持つと、非常に信じ易いのである。

「この世が斯くの如くあるのが神の恵みである。我々がこうやつて暮して居れるのが仏の慈悲である」

と、これなら甚だ説き易い。ところが、
「ただ可哀想に思召して下さるのである。唯、哀れんで下さるのである」

から、甚だ分りにくい。即ち信者の人なら、極樂に参れるで聞かな、得心がいかなことになつてある。総て我々は何か物を持ちて解き度い／＼という風になつてあるのである。ところがそれで喜んで居る信仰であると、

弥々となつて、そのものが必ず砕け出す。死ぬと極樂に行く喜んで居るのであると、現在死ぬのがいやでならぬのであるから、弥々となつて必ず駄目になる。我々斯くの如く平和に生活が出来るのかと思つて居るのであると、その平和は必ず破壊する時節が現われて来る。私の心は真面目

に考えられる様になつたからと、それで言うて居るのであると、それも必ず碎ける時がやつて来る。総てかくの如く物を持ち、安んじて居る、信仰であると、その物が碎けて、信仰の中心たるものが無くなつて仕まう時が出て来るのである。

嘗ても申したことがあるが、よく道を求めて訪ねて見せる方が「私が」と仰しやる。私「貴方はその私が分つて居ぬのでないか。それは貴方の思いでそう思うて居るまでの仏に過ぎぬでないか」と。かく言われると忽ち消えてしまつて空虚になつて来る。現に私自身が長らく非常に喜んで居つたのであつたけれども、一つ行き詰つた為に、今までの仏が何処へか行つてしまつて、

宇宙の本体、真如の哲学、一文の価値も無くなつてしまひ、四方八面、唯頼みなきものばかりとなつてしまつたのであつた。すると然うなつた時、そういふ喜びにとどまつて居てどうするか、と申すのである。

「斯る者を御助け」の語に何等の

安心味無し

この間も越後から或る僧侶の方が、久し振りにお出で下されて、頻に念仏をお称えになる。私「大層貴方よくお称えになる」というと「イヤ此頃は分称えさせて貰うようになりて、第一近頃は念仏の趣味を感じるようになって」

事しても差支ないことになつてしまふのである。それ故、その方も、前々からここを不審に思われて居たそうで、或時或人にそのことを聞かれたら、その人は「その邪見が真宗の有難い処である。どんな悪い事しても、それを何処までも捨てて下さらぬ処が、真宗の真宗たる処である」と。そう云われたけれども、自分はどうもそれでは心が落ちつかぬ。これはどういふものであらうかとお尋ねであつたのであつた。

私は信者の人の中には、必ずこれになつて居る方が少くなからうと思ふのである。一方に針の先で突いた程のことまで、真面目に／＼とやつて、最後にそれでもいかぬ処が出て来ると「斯る者をお助け」と、これで一辺に追い放しにして居て、それで気が付かずに平気で居る。うっかりして居るのであるけれども、一つ本氣に考えて来ると、ここでこの、両刀使ひになつて居て、真に安心にはなれぬでないかとのことを申すのである。

成る可く信者の方のお分り下さるようと思つて話して居るのであるが、私など煩悶した時が矢張りこれになつて居るのである。飽くまで真面目に／＼と考へて、又真面目に為し得る積りでやつて居る中に

「待て、自分の心が人に善く思われぬ、満足が出来ぬとして見ると、自分は今日まで犠牲的にやつて居る、献身

』と申される。私「へい。念仏の趣味も結構なれど、一つ貴方、聞いて行かれてはどうか。貴方、いつお帰りになる」その方「今晩帰る積りで居たのだ」とのお話である。私「どうです。一日延ばして明日聴いて行かれぬか」と申すと「イヤそういふ事なら一日延ばすことにしましょう」と申される。私「貴方よくお延ばしになりましたな」、「イヤ先生が私のため御教化下さるとあるのですもの」と。

こう云う態度でその日もお話申上げ、翌日も聞いて下された。そして段々話した最後になつて、その方「どうも、自分は最後に、分らぬことがある。自分はこういう風に段々喜ばして貰うて居るのであるけれども、最後になつて、どうもひと所面白くない。それは段々やつて最後に、斯るものを御助けと、自分はこの、斯るものを御助けが面白くない。こんなことを言うてるのだと、何んな悪いことをしても、斯るものを御助けと、甚だ邪見に墮ちてしまひそう、どうも氣に喰わぬ。これはどういふものであらう」と。

これは信者の人が「こう頼まれた、あ、頂けた」と、さういふお返して、何うしてもそれでは、いけぬようになると、斯る者を御助けと、この癖がある。私これが甚だ氣に入らぬ。「今日はお正忌、御照覧の席である。けれども私は汚いもの、耻入つたものである。けれども私は斯る者を御助け」と、こんなことでやつてゆくのなら、何んな悪い、

的にやつて居ると思つて居たのが、皆これ名譽心でやつて居つたのでなかつたか」と、私の苦しくなつたのは茲だったのであつたそれまで随分理屈も言うていた。極楽に立派に仏がお出でになると、さながら絵に書いたような仏もあつたのであつた。が、それがい／＼自分がいかにいなくなると、みんな消えてしまつた。

そうなつた時に、そこで「斯る者を」が利くか、何うか、「私は腹が立つ、斯る者を御助け」これは出来る。「人に言いすぎた、斯るものを御助け」これは出来る。が自分が悉く残らず悪しくなり、一文の価値も無なくなつた時に、「斯る者」で安心が出来るか。到底そんなことで安心がなり得ぬのである。私共若い時分には茲の処で聞き違えて居た。それは仏は「悪うてもよい、悪うてもだぢないぞ」と言われるのだと聞いていた。

処がそれは、私がよくないと思つて居る処へ「そのよくなくてもよいのだぞ、悪くても構わぬのだぞ」と言われるとなるから、何程そう言われても、私の方がちつともよく無い。何程悪いまま聞かされても、それでは少しも安心にならぬ。「今日は御正忌御影向のお日柄である。けれども私はちつともそんな氣がせぬ。けれどもせいでもよいのだ」と。これではどうしても本當の安心にはなり得ぬではありませぬか。

実意ある友の一言

そこで何より言わんか、先ず私の気持ちより申しますにこの時、私が悪しくてよいのだと言われて、私にはちつとも安心ならぬ。これは今日青年の思想界に於いても

「今迄出来ぬことをしよう／＼として居たからいかなんだのだ。寧ろ出来ぬ有の儘を打ち出して安心しよう」として居る側がある。処でこの「出来ぬでよいのだ」で

安心が出来れば誠に結構であるけれども、今いう如くで、これでは本当には安心が出来ぬ。

この時、真に、私の苦しみ心中を見て呉るる一人の友ありて、

「如何にも君がそれ程までに真面目になり、何処までも献身的にやろうとした処の誠意は認める。けれども人間なるものは、結局我慢の代物で、何程自分を捨て、やろうとしても、最後になると、自分を捨てる事が如何しても出来ぬのだ」、——これは妙なことを言いますけれども、私はその時こんな愚痴が思われた。それは

「自分はこれまで真面目に／＼と生きてやつて来たのであるけれども、最早や斯くなる已上は何ともしようが無い。自分はこの儘身を捨てても、それは仕方が無いとして諦めもするが、けれども世の中が斯く強い者勝ちで、真面目にやる者程却つて滅亡するとする時は、自分の事はよい

の旨趣なれば、捨てられない限りそこを何処までも見てやるぞと、一念、仏のお慈悲なる事は、今までのあたりこの不思議の呼び声なる事に目をつけば、この一語こそ実に、我等の胸の中心を貫かるる処の一語であるのである。

しかるにこの処がしつかり聞えぬから「真面目になれなくてもよいのだ。浅聞しくてもよいのだ」とすると「向うはよいと言われても、此方がそれでは困る」と。大低がこれになつて居るのである。

そこでいよ／＼、一念徹底の味わいは、我々自分の思いで思えるのでない。向うからこの遣る瀧なき思召して何処までも言うて下さる。その御意趣のほどを聞かせらるると、茲で此方から受け心を言うに及ばぬ。受け心はひとり

で出て来る。教えて貰うことはいらぬ
「ウン成る程、このどうしてもまことに切り切らぬ、茲をそれ程までも思召して下さるのであつたか有難い」と。で「斯る者を」は、ここで出て来る。

本当の「斯る者を」は、このお慈悲が聞えて出て来た言葉であるのである。処が「信心がどうじや、安心がどうじや」となると「斯る者」と聞くのじや」となるから、ここが空になる。而してその出て来た処が、一念帰命の信樂開発とこうであります。

未完

としても、これでは世の中が分らぬことになつてしまふ」ところいふ風に考えた

「斯くの如く世の中が各自に勝手にやつて居る時は、真面目にやる者程仕損になつて、自分の事は仕方が無いとするも、これでは世の中が成り立たぬ」

とこういふ風になつて来た。大層理屈のようであるけれども、之が世の中がで無い、やはり自分なのである。自分が我慢さえ捨てられれば、何も世の中がというて苦しまんならぬことは無いのである。

そこでこの捨たらぬ様を見て呉れた他の人が
「汝それ程真面目に捨てようとして居るのであるけれども、その捨てられぬのは、捨てられぬのがもつともである」

と。茲で「捨てられぬから、我慢を起してもよいのだ」といわれて私は面白くないが

「それ程真面目にやろうとしても、その捨てられぬ、汝の苦衷は察するぞ、それ故、我はその捨てられぬ汝を何処までも見てやろうというのである」

と。私にはこの一言が何より有難いのである。

○他方、本願の旨趣は、斯く私が飽までまこととやろうとしても、我慢が捨て切れぬ。そこを「捨てられ無くてよい」で無い。その捨てられぬ処が可哀想で捨ておけぬのが発願

絶対無碍

池山栄吉

私達はあくまで自分の力で押通そうとする。自分の覺であることには気がつかない。それが私達の本性だ。

如來は、私達がそれで行詰るのを見抜いて居られる。そしてやるせない矜哀から、常住不斷に、清淨、真実、至誠の心をもつて、私達にむかつて居て下さる。

私達が、それにすこしも気づかずに居ようが、いくらか気がついて居ながら頓着すまいが、疑おうが、をしろうが、おしのけようが、ふみにじろうが、其外どんなだいられた態度に出ようが、怒らず、呆れず、いとど悲れみ慈しまれるばかりで、どこ／＼までも見放そうとされない。

これが無碍絶対の大慈悲というもので、私達は早晩この大御心のまことにほだされて、わがはからいをなげうたすにいらなくなる。

光載永劫の修行とは、遠い／＼昔にあつたこととばかり思つて居ては勿体ない。現に思しらすの私達に対して、忍んで遂に悔いたまわぬ如來の態度がそれなのだ。

「絶対他力と体験」より

求道会館の石の鐘(二)

— 求道の象徴 —

昭三四・四月

聴聞子

(注) 記号のこころ

○……………真諦門 (信仰へん)

△……………俗諦門 (道徳へん)

◎ 信の力 (大正一四年)

○ 業と本願 〓し、ようと、思つても、できない、(業)。

そのできないところを見てくれる人 (五劫思惟の本願)。

△ 二種の道徳観 〓「カネを返さないでもよい」というに對して、Aは「しかし、返さなくてはすまない」といい、Bは「それでは、返さないでおこう」という。返せるくらいなら、「返さないでもよい」とはいわぬのである。

す、よく見てくれるのである。

△ 事業と信の力 〓自分では前途の見込みのつきか、ねるところを、どこまでもよく見て下さる広大なホトケの慈悲に安んじて、やらせてもらう。これを「信の力」という。どこどこまでもと苦樂を共にして下さるあたたかい力なのである。

○ 救い 〓こちらの苦しい心の中を察してどこまでも思つてくれるから、こちらの悩みも慰められる。これが「救い」である。

○ 一念 〓もともと返せないものを返せるように思つていたのがまちがいであつた。これを見て下さるホトケがあつたか、と気がついて見れば(一念)、わが身のことも知られて有り難いのである。

△ 「天われを捨てず」 〓どこどこまでも見捨てないホトケである。

△ 行きつつまり・投げ出し・入信 〓つき、当つてはじめて信仰に入るのではない。向うのあわれみの深切心が屈いて(よく聞いて)みれば、「なるほどわが身ではできなかったのだ」と、つくづくわかる(信)——お慈悲に腹がふくれるから「投げ出し」ができるのである。

△ 感謝と業 〓「有り難く思えない」のが煩惱(心身をなやます精神作用)であり、業(自分の力ではどうにも

だ。返せるのに、「では返すまい」では、横着に聞える。

△ 業報観 (現在は過去の「むくい」) 〓自分のことを離れて言つてはわからない。

○ ホトケの同情 〓 われわれのできないところを無理ない、と見てくれる同情であるからどこどこでも同情をそそぐのである。絶対の無力者に対する絶対の同情心(慈悲の力)である。できなければできないだけ、ますま

ならぬもの)なのである。

○ 惑い・信後 〓信仰を得たからといつて、つばな生活ができるのではない、(業)。「あした夕べに迷いに迷うあさましいものだが、ただ、本願によつて救われるのである」(連如)。

○ 眞実 〓このあさましいところを(しりぞけず)お見すてない「ご眞実」である。

△ 謙譲 〓他から見ればこそごうまん心が起らぬまでのこと、本人は、あさましい心に悩むのである。

山のあなた

カアル・ブツセ

山のあなたの空遠く
「幸」住むと人のいう。

噫、われひとと尋めゆきて、
涙さしくみかえりきぬ。

山のあなたになお遠く
「幸」住むと人のいう。

善 智 識 を 訪 ね て

福 島 政 雄

そこで文珠菩薩の前において善財童子が、阿耨多羅三藐三菩提を求むる心を起す、無上菩提の道を求むる心をおこす、こう云うことになります。

この無上菩提の道を求むる心をおこす。このおこすのは実はおこさせられた。仏様の御心がそこに及んでいるというわけでありませう。

そこで善財童子は文珠菩薩に向いまして、あの有名な求道のうた、求道の偈文を申し述べるのであります。それは大分長いのでありますけれど、その初めの方のところの意味だけを申し上げます、

大智慧、威神の力を持たせられて

菩提の行を行じて、衆生を利益し給う。

と、これは文珠菩薩に呼びかけて申すのであります。

どうぞあわれみをこの私に垂れて

そして愚かさの闇、私の無明心があつて無明の闇というもの

ものが常に私を覆いかぶせて居りまして、

むさぼりやら、いかりやら、そう云うものが常に起つて

火が常におこつて焼いて居るような有様であります。

そして悪魔の王と云うものが、自由自在にその中に居りまして、私自身は、愚かな若者、愚かな凡夫としてここに止つて居るような次第であります。

先ず人にへつらつて見たり、人をたぶらかして見たり惑つて見たり、恨んでみたり、そう云うまどい、そう云う

乱れというものが始終おこつておりまして、

その根本というものは貪欲と云うものにまつわり繋がれて、縛られて居る様なものであります。

そしてまた疑いの心も持つて居りまして、その疑い惑う

心というものが私を覆いかぶせて居りまして、また盲、

まるで眼の見えない盲の様な有様であります。

そうでありますからして始終間違つた邪道を歩んでいる

それにまた物惜しみしたり、ねたんだりする心にも縛られて居ります。

それですから所謂三途の八つの難儀な中におち入つておりまして、迷いの世界を巡りめぐつて、私自身知らずに居るような有様であります。

そこに生老病死の苦しみというものが私に迫つて参つて

私の申上げることをお聞き下さい。

ただ今の有様は、愛の水が深くあります。

愛欲の水であります。それが深くありまして

それでもつて自分の罅りに池をめぐらして居るようなものであります。

それから憍慢の心がありまして、

おごり高ぶる心がありまして自分の身の罅りの垣を作つて、人を隔てゝ居る様なものであります。

そして諸々の迷いの世界に入るところの門になつて居るようなものであります、

三つの迷ひの世界というものが、仲々その迷いを超越するといふことがむつかしくありまして、

その城廓の中に、私は閉ぢこめられて居る様なものであります。

そう云う苦しみを私はうけて居ります。

私の姿を申し上げますればこの様な有様であります

こう云う惑いを亡ぼして下さるところの大悲の仏様、清らかな陽のようなお方、その智慧の光は普く照らし給う

円満なお方であります。

この生死の煩惱の海をすつかり干しつくして下さる力をお持ちになつて居て下さるお方でありませう。

どうぞその慈悲の光を下してくださいませ。御覧下さいませ。

と云うような意味のことを始まつて居ります。まだ長いこと続いております。これがこの善財童子の求道の偈文の初めの方でありますけれど、それで心持の方がすつかり解るのであります。

ただこれが今申します通りに善財童子が自分の姿がこう

云う有様であると云うことが解つて来たといふことが、無上菩提の道を求める心が起つたといふことと一つになつて居りますのであります。それが仏の智慧、文珠菩薩を通じての仏の智慧に照らされてそう云う自分の姿に目がさめて、そうして仏様に願つて居る様な有様であります

そうすると善財童子の心持を聞かれました文珠は象王の廻るが如くとありますが、大きな象がゆつたりと、身体を

廻すというよりなことでありましょう。象王の廻るが如くに、善財をあちらから、こちらから御覧になる。そして言われますことは、

「善哉、善哉。よいかなく。汝よくすでに阿耨多羅三藐三菩提心をおこせり。実にいいことである。それで無上菩提の道をお求めるところの心がおこつたといえるのである。菩薩の行というものを前はずねておこなっている。」

と、こう善財童子に対して云われました。すると

「これからどんなにして菩薩の行というものを学び、また修行して、又菩薩行というものを自分の実際のおこないとしておこし、それを満足し、菩薩行を淨くし、菩薩行を本當の方向に転じて、その後菩薩行に深く入つて、又その菩薩行というものがつけ焼双でなく自分から産み出す行というものになつて、そして菩薩行というものをよくよく観察して、おし広めて行つて、そして菩薩行を成し遂げて、そして菩薩行を充分に円満にする。こう云うことを致し度いのでありますが、如何でありますか」

と善財童子が文殊菩薩に対して申しますのであります。これからの文殊菩薩が、善知識が斯様々々であると、

求道の第一程を指し示すということになるのであります。そして五十三人であります。五十三人と云うのは文殊に始まつて普賢に終わるのでありますけれど、文殊菩薩は二度現われて来る。斯う云う工合になつて居りますから五十三だそうであります。追々このことは後で申し上げますが、これから文殊菩薩の指示に順つて訪ねて行くのであります。それからさきのこととは、この次にさして頂きたいのであります。

述懐

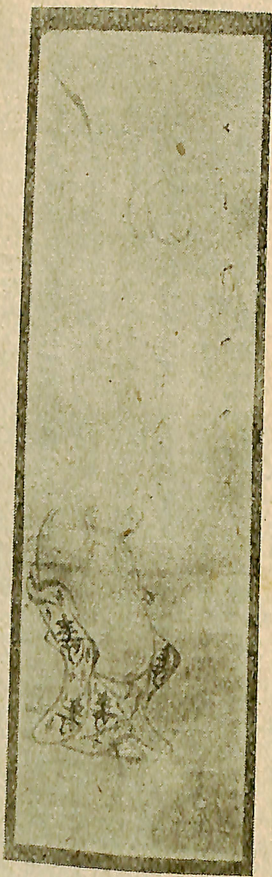
福島先生

しみじみと仏の御名のかよひ来てすさびし胸のなごみわたれる。

過ぎし日も今日も来む日も煩惱の無窮流転のこの身なりけり。

永劫の闇迷い行くこの胸にとこしえにひびくみ仏の御名苦しみも迷いも暗もそのままにただみ仏の胸にささぐる永劫のまことのいのち御仏の光に融くるこの身うれしき超断の仏の御声愛欲の暗きこの身の胸にひびける

歌集「心光」より



布袋鞆を
蹴るの圖

神原徳草

白隠禪師は絵が上手であつた。それはこういう因縁がある。若い修行時代に法華経は釈尊の出世の本懐を説いた經典であると教えられて拜読したが、法華経の八巻の大半は譬喩ばかりで、何が仏陀の真意を顕わしているかわからなかつた。それで仏教そのものに疑いをもつに至つた。

だが師匠の風貌にみる所謂禪の悟達の境界というものは疑いがもてない。そんなにうたがいためらうている白隠

に師は、『江湖集』という語録を読むことを訓えられたので、それをひもといて読むうちに或る一節に打ち当つて大いに疑惑を増した。

それは中国の宗匠で巖頭和尚というお方があつた。仏の思召しにかなつて当代に宗風をふるわせた名高いこの和尚は、村里を去る山中の一小庵に住していたが、ある晩に夜盗にあつて、しかも兇刃の下に切り殺されてしまつたので

ある。その臨終の時の巖頭和尚は「助けてくれ」と連続絶叫したという。その声は「牛声」（牛がもうと鳴く声）が聞こえる程の距離）四方に達したというのである。つまり大ごえをあげて助けを求めたのである。

この条を白隠は読んで、疑いはいよ／＼深くなり大煩悶におちいつた。悟つてもそんなことなら禅とは何であるか、修禅をすつべきか。大悟した大宗匠たる巖頭知尚のこの末期は「珍重ス大元三尺ノ劍、電光影裏、春風ヲ斬ル」と自若として元の兵のかざす大刀の前に頸をさし出した大徳、仏光国師の風はなく、全く愚俗凡庸の徒の最後と何等選ぶところがない。これが禅の悟達の境なのか、それなら何で修禅の要があるう。

しかし莞爾として大刀の下に坐した宗匠もあり、それらと同じ境地の禅匠に伍してならび録されているのであり、祖録要典として今日まで伝承されて疑われていない。これらを伝えた先覚の意は如何。兎に角、白隠は二進も三進もゆかなくなつてしまつた。そして今日でいう神經衰弱症にかかり、一時求道修行をなげうつて、漢籍に親しみ、又絵筆に親しんで心を慰めていたのである。

そして時機調熟し、一夜、語録『禅関策進』の一章、「慈明立錫」のくだりを拝読して、慈明和尚が修禅の時、睡魔におかされると、自ら錫を股に突き立てて睡魔を制

十年も前に写真版で見たのであつたが、この頃、何かの折にふと思いついて、今でも布袋さんの笑つた顔、まりが真中がくびれている一あの宮中で行われる蹴鞠の遊びのまりと同じのが、空中にいま打ち上げられたばかりのように飛び上つているところや、その蹴つている足の古拙なところや、その全体が簡素で幽雅にみちたところ、その妙趣は、眼前に浮んでくるのである。

この布袋まりをけるの図を、ふと思ひ出したのは実はこんな状態のこのごろなのである。

あまり毎日毎日あれやこれやの意馬心猿の乱れに相も変らず困憊している私である。一例を挙げると、子供の生長を願っているが、しかし生長するにしたがつて、親から離れて独立した人格となり、親に対立してくる。親の心、子知らずという愚痴である。といつて何時までも親にぶら下られていられてはこれはまたこまる。子供であれば子供で困り、生長すればこれまたこまる。ではどうなつてくれたならよいのかといえは、親の願うところを身に体して、生長しても将来の方向を見誤らずに立派に伸びていつてくれることである。だがこれは現実望めないことである。六十に近い私が曾てのその時代にもそうであつたはず、それの子供に求めるのは無理ということである。そういう無理難題が、しかし通したいのである。では、全く通し貫きた

し、遂に大悟徹底したとあるにいたつて、奮然と再び志を新にし、喪身失明をさげす、奮進に修行して遂に大悟したのであつた。そして大悟達るとき思はず口について出た言葉は

「やれやれ、巖頭和尚はまめ息災じやつた、まめ息災じやつた」

であつたと弟子東嶺和尚が伝えている。

白隠の画はこうした煩悶の期間に習われた所産であつたが、後年、清風明月の日、常に弟子達を接待するあいだ、時おり画によつて心光を顕わし、接化の手段としたのである、煩悶憂悩のあいだにならつた画が、そのまま悟後の活動に光を添えたのは、まことに『氷おおきに水おおし』であつて、親鸞聖人が叡山時代に和歌に秀でていられたために、宮中などへ使者に立たれたときなど、和歌でお返事なされたことと伝えられるが、それが晩年のあの大部の御和讃の製作となつたこととも思ひ併されて尊いことである。まことに、初雪に野も山も、白一色に化して余すところもない趣きである。

白隠禅師の画には、達磨、観音、その他が残つているが、その中の一つに「布袋鞠を蹴るの図」がある。私は

いかというと間違ひであることもわかる気がするし、そんな深い真実の愛情もない、ということもわかるのである。つまりはつきりとわかつていない、頭のどこかで判つて、身心一如に判らないのである。この一応わかつたようで、徹底したところへゆくと、実は画餅に等しく、全く駄目な私である。これを無明と云うのであろう、無始以来から、無窮永劫にこれなのだときかされるが、その場は腑に落ちても、その心は鎮まつていない、次の瞬間にはあらぬかたに走りゆき、又無明の惑いに還つてしまふ。無明の巢窟裡がわがすみかであつて、決して明とか、覚とか、光とか清浄とかでない。唯識では「業の転ずること暴流の如し」と説かれる。まことに迷いは果てる日はなく、繰り返して現在に生きているのである。

布袋和尚は、こういう私に関連してでもあるのかフト心に浮んだことだつた。この布袋さんの足にけあげられているまりが、私だなあと思える。布袋和尚はこの場合、阿弥陀仏に見立ててみるのである。禅から云えば別の看かたもあるう、今はお念仏の上で、この「布袋まりをけるの図」を味つているのである。

笑みをたたえた阿弥陀仏は、そういう毎日々々を臨終一念の夕べまで続けるほかない私を、御承知なのである。歎異鈔の九節に

『しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は、かくの如きの我等がためなりけりと知られて、いよくたのもしくおほゆるなり』

とある。『しかるに』の一句は、私の今迄の、またこれからの一切を含めて、すっかり御承知の上で、それら全体をひつくるめて、いだきとつての御言葉である。画で云えば布袋和尚の爪先に籠つた力がそういう気配を表わしている。『仏かねてしろしめして』は和尚の総身に溢れた本願力である。私というまりが迷いに沈み、子供のごとに悩まされて落ちてくると、ポンとけあげて空中に躍らせて下さる。『煩惱具足』のまりが『かくの如きの我等がため』と空中でいよく『たのもしく』おほえるのである。

所がまりは空中に停止しないで、必ず落ちる性質である。いかに高く、空高く雲の中まで上つたとしても、上つただけは必ず落ちてくる。それがまりの本性である。それが迷いの本性であるから、どうしても落ちねばならぬのが私である。すると、その落ちる早さ遅さの程度の差こそあれ、落ちきつて、地面に当たらないか、当るかの、ほどよい時機を和尚はとらえて、又ポンとけ上げて下さる南無阿弥陀仏である。

落ちるまりも永い年期がはいつていてまことに性こりも

ないが、それにも増して、打ち上げる布袋和尚の妙手妙用は一段と光を放つ。にわかには思いついてのまり蹴りではない。それを目的、それを本願としての苦修の上に体得された、元手のかかつた大慈悲の妙用妙技である。

常に墮獄のまりは、常に揚つて空にある。そこに南無阿弥陀仏と響いてくるのを聞くことができる。和尚の爪先めがけて落下する刹那、南無阿弥陀仏の響きがまりを蹴上げてくれるのである。白隠禅師ではないが「巖頭和尚はまめ息災じやつた」であり『いよくたのもしくおほゆるなり』である。

まりが常に布袋さんの爪先から上の空中に上つたり、下つたりして、地上に落下しないのは、まりの力では絶体に出来ないのであつて、ひとえに布袋和尚の御力によるのである。

まりが、御厄介をかけなくなる時、それは『法性の覚悟すみやかにあらわれて、尽十方の無碍の光明に一味』になるとき、即ち、この一生を終つて、御親の国、西方の御浄土に往生させて頂くときである。(三一、一〇、一一)

正 信 偈 私 解 (十)

序記。親鸞聖人の生涯

御本典化巻後序に言わく

「ひそかにおもんみれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道今盛りなり。然るに、諸寺の釈門、教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷うて邪正の道路を弁うること無し。斯を以て、興福寺の学徒、○太上天皇・諱尊成(号後鳥羽院)○今上・諱為仁(号土御門院)・聖曆・承元丁卯歳・仲春上旬の候に、奏達す。○主上臣下、法に背き義に違ひ、忿を成し怨を結ぶ。茲に因りて、真宗興隆の太祖源空法師ならびに門徒数輩、罪科を考えず、みだりがわしく死罪につみす、或は僧の儀を改めて姓名を賜うて遠流に処す。予は其の一なり。しかれば已に僧に非ず俗に非ず、是の故に、禿の字を以て姓と為す。」(原本では○符の所で改行、) ()内の文字は

頭註。

是は祖聖が『教行信証』を結ぼうとして先師法然上人の厚恩を偲びたまうにあたり、先ず承元の法難をおもいおこしたまうた文字である。

白 井 成 允

承元の法難は祖聖の御生涯に於いて時期を劃する大事件であつたこと、言うまでもない。之によつて祖聖は京洛を難れ辺土にさすらわねばならぬ身となられた。而も之によつて北陸関東の地に大悲の念仏が流れ伝わることゝなつた。今此の法難の史実を叙べることはすべて略く。たゞ私は特に此の後序の文に係わりて些か思う所を記しておきたい。

此の文は承元の法難を憶い起したまう。其の中に特に「主上臣下、法に背き義に違ひ忿を成し怨を結ぶ」という

一句が著しく感ぜられる。其の前は此を誘い来つた諸縁を顧み、其の後には此に因つて起こつた必然の果を叙べるので、それら前後始終を在らしめる現実の事を告げるもの実に此の一句だからである。然るに、こゝに言われるところ、背法違義成忿結怨、この煩惱罪業の焰に燃ゆる者として、ひとり臣下のみならず、主上を挙げ示しておられる事を如何に解すべきか。

顧みるに、僅か十余年以前、かの大戦の頃、吾等は官権によりて此の文の中の「主上」の二字を削らしめられた。（興教書院版『真宗聖教全書』第二卷・昭和十五年版の如く。）天皇は神にましますが故に、其の御言行を臣民としてあげつらうべきではないとである、則ち此の句に於いて親鸞は不敬の筆を弄んだとして之を写すことさえ禁ぜられたのである。然るに今日は、まさしく之と反対に、此の句に於いて、主上の權威にさへ反抗する者として親鸞を称揚せんとする風潮が見られるようである。時勢の激変・人心の動揺、哀しむべく、深く省みるべきである。

いつたい此の文は『教行信証』全六卷の結びの文である。其の全六卷は、祖聖の信心の告白であり、その信心は祖聖が先師法然上人から伝えられたまうた所、祖聖にとつて御自らの全生命の存在の理由又は意義である。之を告白したまう所以はたゞひとえに「深く如来の^{おぼ}ゆる^{あわれみ}なる哀を知

情に於いて在らせられたかは、此の文の書き方だけをみても直に窺われることである。是れは、本書の祖聖真筆稿本に於いても、又其の清書本に於いても、上に注記しておいたように、「太上天皇」・「今上」・「皇帝」の文字をば各行を改め書し、「主上」の文字をば、前者にては其の上二字文を缺きて、後者にては行を改めて、記しておられる等の事から言うのである。だから今窺うている此の句は此の如き敬虔なる心情から流れ出たものであることを省みなければならぬ。

ところで今日では此の句に並べて或は同じ『化身土卷』の末既に此の後序の文に近き辺に引かれたる『菩薩戒経』の言が云々せられる。即ち「出家の人の法は、国王に向いて礼拝せず、父母に向いて礼拝せず、六親に務えず、鬼神を礼せず」と。此の引文を^{とどろ}として、或る有名な史学の博士が「国王に向いて礼拝せずと宣言した親鸞が」等と筆を弄している。然し私には此の引文の意を其の様に解することはできない。此の引文が置かれてある前後に連なる数多の経論の引用に照らして明らかかなように、此に「礼拝せず」とは宗教的信仰の対象として礼拝せざるを言えるのであつて、決して世間の道德として国王や父母に向つて礼拝せずと言へるのではない。祖聖が父母に対して如何に深き思慕の念を懐いておられたかは『歎異抄』第五章の文

り、良に師教の恩の厚きを仰ぐ、慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し」の感激に因りて、如来の本願を永く後世に伝え、先師の遺教を偏く群生に知らしめんとである。其の如き御書の結文として「悲喜の涙を抑えて」師教の恩の厚きを叙べたまうに当り、先ず憶い起したまえるものが、この承元の法難であり、而も其の中心に此の「主上臣下」云々の句が置かれたのである。其の故に此の一句の意義は、単に之を全巻から引き出だして軽々しく思義すべきではなく、まさしく全六卷に満つる祖聖の信心を体として之を窺いまつるべきである。

此の一句には、もとより、「真宗興隆の大祖源空法師」等をば、「罪科を考えず、みだりがわしく死罪につみし、或は遺流に処し」たる「主上臣下」の処置に対する批判があり抗議がある。然し批判といひ抗議といひ、たゞそれだけの意にしか読まないところに、上に記したような文字の削除或は反抗の称揚の如き態度が生ずるのではあるまいか。則ち之を非とするも或は之を是とするも共に此の一句に潜める真意に立ちての是非ではないように私には思われる。

此の一句の中に、主上に対する不敬の罪を咎めようとする者は、今も猶存するであろう。然し此の後序の文を筆しつゝあられた時に、皇室に対して祖聖は如何に敬虔なる心にも明らかである。国王に対して懐いておられた心情も『御消息集』に於いて窺われる。

詮じそうろうところは、御身にかぎらず、念仏もうさんひとびとは、わが御身の料はおほしめさずとも、朝家の御ため国民のために念仏をもうしあわせたまいそうらわば、めでとうそうろうべし。……「わが身の往生一定とおほしめさんひとは、仏の御恩をおほしめさんに、御報恩のために御念仏ころにいれてもうして、世の中安穩なれ、仏法ひろまれとおほしめすべしとぞおほえそうろう。」

念仏往生の信から世間の道德の展かれてくるありさまがいかにも素直に窺われる言葉である。（かの博士は此の消息を反語として読んでおられるが、私にはそんな説方はできない。）ところが此の言葉の語られている御消息には前半に次のような言葉がある。

「おおかたはこの訴訟のような御身ひとりのことにはあらずそうろう、すべて浄土の念仏者のことなり。このようは故聖人御とき、この身どものよう／＼にもうされそうらいしことなり。こともあたらしきうたえにてそうらわす。性信房ひとりの沙汰あるべきことにあらず、念仏もうさんひとはみなおなじころに御沙汰あるべきことなり。」……「さればとて念仏をとめられそうらいしが、よにくせことのおこりそうらいしかば、それにつけても念仏をふかく

たのみて世のいのりにこゝろにいれてもうしあわせたまうべしとぞおぼえそうろう。」

此は祖聖八十三四歳の頃の御消息と推測されている。其の頃おそらく慈信御房の事により素純なる念仏者達の間に動揺あり訴訟あり、性信房等が鎌倉に上りて力を其の解決に尽くしたる勞を謝すると共に、念仏者が世間の人々に對して如何にあるべきかを示したまうたものゝ如くである。

こゝに「故聖人の御とき」云々とは承元の法難を、「世にくせごとの起り」云々とは承久の乱を追懷せられたのである。仏法に背き道義に違ふ所為が如何に世間の禍亂を繁からしめたか、半世紀を越える歲月に於いて親しく経來りたまひし跡を顧みて、愈々念仏しておられるのである。則ち宗教的信仰の對象として國王や父母を礼拝すべきではないけれども、念仏者は世間にありておのずから國王や父母の恩を知り、其の安穩を冀いつゝ生きているのである。「朝家の御ため國民のために」「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれかし」と念仏もうしあわせるのである。

祖聖が聖徳太子を慕い敬いたまうことの深きは私共の思量を越ゆるものがある。「和国の教主聖徳皇」と仰ぎ、「日本國帰命聖徳太子」と礼し、觀音菩薩の化現として「日域大乘相広地」たるを証し、「如来二種の廻向」を知らしめたまうた恩徳を憶いて、「奉讃不退ならしめよ」と

ながら一たび仏名を称え、一たび信を生ぜん者あらば、其の功德の虚しからざることが示されてある。其の時機の反省は、「愚禿」が念仏もうす信の一筋の道と離れたものではない。

『愚禿悲歎述懐』と題せられる十六首の和讃には、
「五濁増のしるしには
外儀は仏教のすがたにて
内心外道に帰敬せり」

を首とする後半十首を通してしみじみと当時の仏法者の濁悪汚穢の相が歎かれてゐる。然し此の歎きは単に自己より外なる者の相に對する歎きのみには止まれるものではない。却りて

「浄土真宗に帰すれども
虚仮不実のわが身にて
清淨の心もさらになし。」
を以て始まる前半六首の悲しみ、即ち「愚禿」御自身の悲しみと一体なるものである。

すべて此の愚禿親鸞と世間群生と本来不二一体であるという深い智慧又は感覺を思わずして祖聖の言葉を解することはできない。

「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」とは此の智慧を感賞せられた言葉である。況んや同じ時代に同じ日本國に生まれあわせ、同じ劫濁衆生濁の中に在る者、殊に世々生々に仏法を護持し來りたまひし朝家の恩沢の下

告げたまう。殊に

「十七の憲章つくりては皇法の規模としたまえり
朝家安穩の御のりなり國土豊饒のたからなり。」

の一種は「朝家の御ため國民のために」念仏しあうという御意と直に通う言葉である。祖聖に於いて聖徳太子と仏法と日本國との三者は是れ一体にして離るべからざるもの、其の一を憶うときは必ず他の二は含まれている。太子は朝家の御方であり、朝家は太子の鴻範に順いて國民のために欠しく仏法を護持してこられた。祖聖は太子を朝家と國民とを念仏の信に於いて一如に考え感じられたのである。「主上臣下背法違義成忿結怨」と記された時も此の念仏の信が衷に流れておられたのである。

上に掲げまいらせた後序の文に「聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道今盛なり」と言うは、『化巻』に又「聖道の諸教は在世正法の為にして全く像末法滅の時機に非ず、已に時を失し機に乖けるなり。浄土の真宗は在世正法・像末法滅の濁悪の群萌齋しく悲引したまうをや」と言う等しく、是れ時機の問題である。其は「当今は末法にして是れ五濁悪世なり、唯浄土の一門のみ有りて通入すべき路なり」と言われ、「今の時の道俗、己れが分を思量せよ」と省みしめられる。而して其の反省の内容として伝教大師の『末法燈明記』が引かれ、無戒名字の比丘であり

に久遠劫來の業障を悉く転せしめられて常に菩提の道を歩ましめられたる身、如何にして一朝家の御ため國民のために「念仏もうしあわざるを得よう。此の念仏もうす心を源としてかの「主上臣下、法に背き義に違ひ、忿を成し怨を結ぶ」の言葉は流れてたのである。

其故に此一句は其の源なる念仏の心に於いて読まるべく解かるべきである。此は是れ日本國民の歎きである、中にも仏法者たる道俗の悲しみである究竟しては愚禿親鸞の懺悔である。久しく日本國民の爲に正法を護持し來りせたまひし朝家をしてその正法に疑い背きまつらしめ、随つて世間に禍亂あらしむるに至る。此の五濁の激しき痛苦を御身に負い感じつゝ古今を憶い考えて、ひたすら浄土の真宗を朝家に薦め國民に勧め、相身に念仏して挙りて安らけきを得んとの切なる念願を秘めたる言葉である。以上はこのごろ辺土の農民たちに同じて朝廷官権の弾圧に反抗した社会改革者を以て親鸞に擬しようとする数々の見解に触れたので、偶々かの後序の文に因みて、些か私見を陳べたのである。尚、「非僧非俗」の語等については次号に譲る。

(三月八日小庵にて)

編集後記

五月晴れの頃、聖人の降誕会が、あちこちに催され、且つは七百回忌も近いにつけても、九十年の祖聖の御旅姿が偲ばれてなりません。ことに私は最近、

罪障功德の体となる、

こおりとみずのごとくにて

こおりとおおきにみずおとし

さわりとおおきに徳おとし。

と詠じられた老聖人の面影が浮んで参ります。それは罪障の中にあつて、功德の水を求められたのではなく、念仏慈光下に煩惱具足の身として微塵もどうすることも出来ないきびしい業縁の催すままに九十年の旅をたどられた。そこに春が来れば花が開き、秋になれば紅葉する如くに、願力の自然として転悪成善、衆禍波転される、不可思議さをそのまゝにすらくと讃仰されたのであります。

△「信仰徹底の一念」の常観先生の御講話は二回に分けて頂きます。仏語に信順申す、向うから仰うせられる言葉、

そこ一つを頂くことの大切さをねんごろにおとさ下さいました。御弟君常音先生の御言葉にも「誰にも見て貰えぬ自分の我慢の性分をそれ故に取りあげて下さるお慈悲と聞き、人は知らず、我慢のやまぬ自分には、このお一人であらんと決定した云々」とあり、忘れることの出来ない慈語であります。

△「求道会館の石の鐘」は引き続き、抄録されたものを頂きました。私共は聞くにつけ読むにつけ、その時に直面しているところだけにとどまつて、あとは聞き流し読み捨てることが多いので、聞きとられた感銘深いものを、知らせて頂くことは有難いことでもあります。

△善智識を訪ねての善財童子は、文珠の智光に照らされて、自己の浅間しい姿を打ち出して教を乞うという大切なところを信味させて頂けます。

△布袋の図を縁としての榊原さんの随想は、自照誌から転載させて頂きました。原画の墨が淡いので不鮮明なものになりましたが御諒察願います。

△白井先生は、御風邪やら、神経痛やらで御難儀の中を、御原稿を頂き恐縮して居ります。大病後のお疲れの一日も早く恢復なさいますようにと念じて居ります。

御案内

毎月、第一、二、三日曜午後一時半、一道会館例会。

毎月廿四日、午前午後、昭和区小椋町教西寺法話会。

五月廿六日、午後二時半、四日市々

大矢知、真西寺

定価 一部 二十円(送共)

半年 百二十円(送共)

一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区上町二ノ三八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市中種区千種町馬走三八

印刷 人 本田 政雄

名古屋市中種区上町二ノ二八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番